

R3地域協働研究（ステージⅠ）

R03-I-02「多世代参加型の商店街地図創作・活用による学びと交流を広げる地域再生」

課題提案者 洋野町役場企画課

研究代表者 総合政策学部 倉原宗孝

研究チーム員 麦沢紅美（洋野町役場企画課・地域おこし協力隊）

<要旨>

本県最北のまち洋野町は旧種市町・大野村の合併からなるが、全国同様に少子高齢化、過疎化が課題である。その中で、地理的にも海（種市）と山（大野）の資源・魅力を活かしたまちづくりが進み始めている。また少子化の現在だが、地域内外の若い世代の自主的活動も少しずつ生まれてきている。こうした町内の機運を捉え、ここでは合併前の旧町村の中心である商店街を人々の学びと交流の場と位置づけ地域再生に向けた機運形成を目指す。具体的には、各世代メンバーにより商店街を中心とした町・地域の魅力を多角的に収集・整理・検討活動を行い、そのことで地域の再発見や交流を促進していく。当初、商店街を舞台にして、地域内外・多世代の不特定多数の人々の交流・創作活動を計画したが、コロナ禍に鑑み、今回は地域に潜在・顕在する資源の再発見・検討を行うと共に、商店街のオリジナリティある複数拠点を核としながら、そのもと情報受発信、複数拠点間の連携効果などから町内再生を目指した。

1 研究の概要（背景・目的等）

洋野町は旧種市町・大野村の合併からなり、海と山の資源・魅力を活かしたまちづくりなど地方都市ならではの試行錯誤した活動・事業を展開してきている。しかし全国同様に少子高齢化・過疎化のなかで今後の不安は大きく、特に町の中心となる商店街の再生は課題となっている。

その中で現在、町の種市地区と大野地区の両地区で使用する2種類の商品券が存在し町民が購入する以外に、町外から洋野町へ移住された方の定住支援や、再生可能エネルギー設備の設置に要した経費に対する奨励金として交付されている。しかし、商品券に掲載された情報では十分な活用がなされていない。また、個人商店は大型店に比べて入りづらく、何も買わないで店を出るのは気まずいと感じてしまうこともある。本研究は、これら2地区で取り組まれているこれら既存の仕組み（商品券サービスという従来型の努力がされているが、効果は十分ではない存在）を活かしながら町・地域の核としての商店街（街中）として地方のまち独自の再生・創造に向かおうとするものである。

2 研究の内容（方法・経過等）

本研究においては上記目的のもと、両地区をはじめとした町の資源の再認識・発見を行いつつ、その活用を地域内外の多様な視点から検討し合う場を学びの場として実践・創造していくことを狙っていた。しかしながら、今回はコロナ禍の厳しい状況があり不特定多数、居住地混合による体験・場の共有は難しいと判断し、主要メンバーを中心とした地域資源の再認識・発見と共に個別に各商店を訪問しながら店の特徴などを収集し、今後の交流活動に活かすための情報整理とその活用基盤づくりを試みた。また多地域交流の学びの拠点づくりという本研究の趣旨に類似する活動が、地域おこし協力隊などの活動を通じて生成しており、特に一般社団法人fumotoやヒロノバの活動は注目され、これらの経験から知

見を得ることを試みた。

その他、今後の活動に向けた示唆・資源として各地先進事例の情報収集と検討を行った。

3 これまで得られた研究の成果

商店街をはじめ町内の各資源の再認識・再発見の作業を行った。まちの観察と共に現地を歩きながら商店主をはじめ住民などからお話を伺っていった。商店街は一見閑散としているが、店舗内に入ると元気のよい店主（特に女性）が多いことに改めて気づかされる。こうした人材をもっと顕在化させ、また繋げていくことができないか検討される。また古びた様相にある商店街だが、逆にその中に懐かしさや面白さを持った素材があることに気づかされる。経済性優位の都市開発からは逸脱した、こうした素材を活かした再生・まちづくりの方向が期待される。



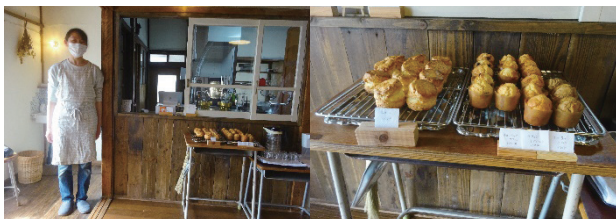
一見閑散とした商店街だが店舗内に足を踏み入れると元気な店主・住民と気さくな会話が楽しめる。少子化や他地域への通学で子供の姿があまり見られないなか、こうしたお年寄りの存在も重要である。



懐かしい置物や道具など、現代でこそ注目される品々が実は各所にあることに改めて気づく。活用し得る貴重な素材である。



食資源は豊富だ。海産物など著名なものから、現代的な料理品まで、ここにも洋野町の豊かさと魅力がある。



今回、個々人との出会いとお話は貴重な学びだった。ヒロノバを運営する松田さんは自らの思いをこの町で開こうとされていた。



店舗減少から商店街としての形態は無くなりつつあるが、しかし歴史性、文化性豊かな素材が潜在・顕在している。それら資源と町に対する住民・店主の思いは強く、貴重な示唆とエネルギーになる。

また各商店街に対してヒヤリング調査を行った。種市商工会議所において、商品券の発注の減少や加盟店の商工会退会に伴い、商品券の流通が減少しているという実状を伺った。また、大野支所においては、消費者目線で商売している店舗には、商品券が流通しているとのことのお話も伺うことができた。

次に、商品券使用可能な加盟店のマップ作成のため、種市地区の加盟店全42カ所において取材を行い、店舗内や店主さんの写真撮影を実施した。取材の内容は、営業時間・定休日・取扱い商品のカテゴリー・店主さんのお名前・住所をお聞きすることがメインだったが、そこからフリートークへと発展し、何気ない会話から、若い世代の来客があったときの接し方が分からないという悩みや、大型店へ消費者が流れてしまう課題、ほとんどの店舗で商品の配達を始めていることなどをうかがい知ることができた。

また、どの店舗も、入り口からは想像できないほど店内は広く、ラインナップも充実しており、入店してみないと分からないことも多かった。そのため、店内の様子が伝わるイメージ写真をマップに掲載することが、改めて重要だと感じた。さらに、加盟店の中には、食品や酒類のほかにも、洋服、化粧品、手芸用品、ストーブと

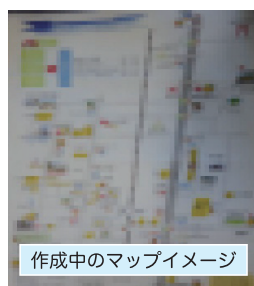


商店街での取材には学生も参加させてもらった。店主にとっても学生との会話は新鮮だったようで店主と学生が意気投合するような場面もあった。こうした取材も学びと交流の場の一つになったようだ。

いった家電製品など、日用品が多岐にわたって販売されていたり、実は製品の修理やサービスにも商品券を使用することが可能だと取材中に判明したりした。これらの情報を、昔から利用している世代以外にも周知する必要があると強く感じられた。

4 まとめと今後の展開

町内資源の散策・収集と共に既存商店街マップをたよりに地元商店街各店舗への訪問、交流に取り組んできた。ここでは少子高齢化、過疎化の現状の厳しさが改めて認識され、その現状を如何に今日的状況の中で改善、向上させていくか行政・関係者と共に再検討してきた。その中で、地域おこし協力隊などこれまでの町内の活動実績がある人材や既存活動との連携体制を育んできた。現在、収集された情報をもとにマップ作成を行っており（下にイメージ添付）今夏には完成、その後活用していく予定である。それらのなかで、既存主体が蓄積していたハード・ソフトを土台としながら、資源活用や人・活動の支援を通じて当町の地域再生に向かいたい。具体的には複数の空き店舗活用によるコミュニティ空間を結びつつ、日常的に又季節毎のイベントを仕掛ける中で町内、特に種市商店街の再生に向かう動きをもたらしつつある。人的、経済的効果が見えてくるまでにはさらに一定の時間が必要となるだろうが、今回の経験、成果を土台としながら、現在の活動の持続展開、また新



テーマの取り組みの導入により、地方都市の新しいまちづくりとしてのモデル形成が期待され、引き続き協働研究・活動に取り組んでいきたい。

地域メンバーにより収集した情報をまとめたマップを作成中。メンバーの諸事情で作業が滞っていたが近く完成し、今後活用予定である。

おわりに

コロナウイルスの蔓延によって、予定通りいかないこともあったが、少人数で取材を行うことや、感染状況が落ち着いた時期を見て、まちづくりに関するワークショップを開催するなど、できることを見つけて、集中して活動することができた。

商店街の取材では、気づけば1時間も話しをするくらい、店主さんと会話が盛り上がる場面が何回もあった。店主さんの、商品に対する愛情や、商売にかける熱意、お客さんのことを考えた創意工夫など、たくさんを知ることができ、地域に密着した商店街の良さを再発見することとなった。こうした地域に密着した店主さんとの情報交換は、商店街の魅力のひとつだと感じる事ができた。

今回の作業・取材等をする中で、もっとその商店の魅力を町民に知ってもらえたら商店街を利用しやすくなるのではと感じ始め、店主さんと多世代の方が交流できる、朝市のようなイベントを開催したいと考えるようになった。

（謝辞）

本研究の実施において町内各関係者にご大変お世話になった。特に各店主・商店街関係者には取材・情報提供をはじめ快くご対応いただいた。感謝の意を記したい。